島宝 とうほうけんぶんろく 見聞録

守り伝えたい
沖縄の宝物を紹介します。

旧大宜味村役場庁舎

沖縄で最も古い鉄筋コンクリート造の公共建築物。地域のシンボルとして今も親しまれています。

飽くなき情熱と探究心で近代を象徴するモダンな建物を創造

沖縄本島北部、東シナ海に面し、緑豊かな山々に囲まれたのどかな大宜味村に、県内に現存する最古の鉄筋コンクリート建造物、旧大宜味村役場庁舎があります。旧庁舎は、現在の大宜味村役場庁舎の手前に佇む白い洋館風の建物で、今から88年前の1925（大正14）年に建てられました。1972（昭和47）年まで村役場として使用され、現在は村史編纂室と資料室になっています。

「建築を志す学生や設計士さんが見学に訪れますよ。古い建物というだけでなく、今なお現役で日常的に使用されているところに価値があると思います」と話すのは村史編纂室の職員、新城喜代美さん。旧庁舎は、鉄筋コンクリート造の技術導入や構造法の歴史を知る上で貴重とされ、1997（平成9）年には県の有形文化財に指定されました。

戦前から残っている数少ない建造物でもある旧庁舎、その設計を行ったのは国頭郡技手として熊本県から招聘された清村勉さんでした。鉄筋コンクリートが日本に導入されて間もない大正時代、清村さんは洋書を取り寄せて独学で研究を積み、沖縄に赴任すると現地の建物をつぶさに見て回り、シロアリや台風の被害を目の当たりにしました。さらに気候、風土、地勢についても学び、沖縄には耐久性に優れた鉄筋コンクリートが最適だと確信したのです。

「当時の建物は茅葺き、ちょっと裕福なところで瓦葺きの木造というのが一般的でした。そんな中でコンクリートというと石、石の建物といえば墓というイメージがあり、なかなか受け入れられなかったそうです」

それでも清村さんは、鉄筋コンクリートにこだわり続けました。まだ20代の若き設計士は、自ら海辺の砂や川の水を口に含み、実際に原料となる砂や水の塩分含有量、骨材の量、水質等を徹底して調査・実験を進めながら、火災にも台風にもシロアリにも負けないコンクリートの良さを住民に訴えました。

その努力が実り、1921（大正10）年に初の鉄筋コンクリート造となる大宜味村公設質屋を設計。その4年後に村役場庁舎が完成したのです。以降、鉄筋コンクリート建築の先駆者として本島北部を中心に様々な公共施設を建設してきました。

意匠を凝らした設計と大宜味大工の高い技術力が結集

旧庁舎の屋上には八角の形をした塔のような小さな部屋があります。ここはかつての村長室で、全方向に窓があり、明るくて眺めのいい洒落た設計になっています。八角形のデザインは壁面に当たる風を逃がすためで、台風時の強い風圧を軽減することが目的でした。村長室と屋上からは海が一望できるので、住民たちも屋上にのぼって漁の様子や漁船が大漁旗を掲げて帰港する姿が確認できるなど、展望台的な役割もあったそうです。

八角形をした2階部分の外観。窓の形、上部の装飾もモダンな洋風スタイルです。

2階室内、かつての村長室です。全方向に窓があり、景色が見渡せます。

旧庁舎の建設工事を請け負ったのは金城平三さん率いる金城組。弱冠22歳の棟梁、金城賢勇さんが指揮を執り、大宜味大工の団結力と技術力を結集して、今までにない凝った造りの建物を実現しました。鉄筋コンクリート造で前例のない八角形の型枠工事に果敢に挑戦。お手本のないなか、職人としてのこだわりと気概がモダンな洋風の建物を造り上げたのです。

「砂は海の砂を何度も水洗いして塩分を取り除いて使い、入り口のカウンターは、子どもたちが集めてきた貝殻を練り込んで磨き上げるなど、地元の人と一緒に、地元にあるものを活用して、財政的な負担をかけないように建てた、その姿勢が素晴らしいと思います」

1階中央スペース。八角形の2階を支えるための柱は変則的な五角形をしています。

築88年を迎え米寿祝い（トーハキユーエー）が開かれました

数えで88歳を迎えた旧庁舎の米寿祝いが2012（平成24）年11月17日、村立大宜味小学校体育館で開かれました。建物も人間と同じように祝福したいという思いで、約1か月前から資金造成イベントや関連事業、学校現場では旧庁舎に関する講話や学芸会で大宜味大工の劇を行うなど村民あげて取り組みました。当日の記念式典と祝賀会では、この年の米寿の村民から献杯をあやかり、熊本から招いた清村さんの孫に感謝状を贈呈。建築関係の人々も集い、旧庁舎をテーマにしたシンポジウムなどが開催されました。「次は97歳の風車（カジマヤー）、100歳を超えてもずっと大切に継承していきたいです」。長寿の村の長寿の建物は、いつまでも変わらない地域の宝として守り継がれています。

米寿祝記念碑。村民から募った旧庁舎への思いを詠んだ琉歌が刻まれています。

旧大宜味村役場庁舎　大宜味村大兼久 157

島宝コラム

進取の気風と技術を備え、県下に名を馳せた大宜味大工

戦前、耕作地が乏しかった大宜味村では、男たちのほとんどは小学校を卒業すると村外で大工の親方に弟子入りして技術を身につけ、家族を養っていました。20歳になる頃には棟梁として組を率いる人も多かったそうです。勤勉で常に技術を磨き、新しいことにも積極的に挑戦する気概にあふれていたことから、大宜味大工（ウジミセーク）といえば、腕が良く信頼できると評判でした。旧庁舎内には、機械のない時代に大宜味大工が使っていた古い大工道具が展示されています。写真は、「墨つぼ」といって墨を使って長い直線を引く道具です。

みんなでグッジョブ運動　グッジョブセンターおきなわが開所しました。
～生活から就労までをワンストップでサポート！
ジョブたん

みんなでグッジョブ運動　グッジョブセンターおきなわが開所しました。
～生活から就労までをワンストップでサポート！
ジョブたん